

機関番号：12601

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007 ~2010

課題番号：19510268

研究課題名 (和文) ジェンダーで読む労働運動—近代化過程のドイツを中心に

研究課題名 (英文) Worker's Movement and Gender in Modern Germany

研究代表者

姫岡とし子 (Himeoka Toshiko)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：80206581

研究成果の概要 (和文) : 本研究では、ドイツ近代における労働運動のなかで、男性性・女性性が構築されるプロセスを、当時の労働をめぐるジェンダー状況と関連させながら考察した。男女が競合するようになると、女性は家庭という言葉が登場し、労働運動や労働から女性を排除したり、男性的性格をもたせようという傾向が強まることが明らかになった。これは、社会主義系の労働運動だけではなく、右派ナショナリズム系の職業団体にも当てはまることで、後者は反フェミニズム運動で大きな役割を演じる。女性労働に敵対的でない勢力や、女性運動の側でも、ジェンダー的視点をもたずに、もっぱら階級の観点が強調されるため、資本による女性労働搾取に反対するために、結果的に女性が「弱者」として構築されたり、「家庭の崩壊」が指摘されたりすることになるプロセスも明らかにした。

研究成果の概要 (英文) : This work considered the process of constructing masculinity and femininity in modern German workers movements in connection with working situation related to gender. As the gender concurrence was getting harder, the discourse 'women belonged to the home' appeared and became louder. At the same time masculine character of the working movement should be strengthened. It is not only in the case of socialistic working movement, but also in the nationalistic right wing occupational organizations, which played a important role in the antifeminist movement. This work explained the process that people who didn't have hostile relations to feminist movement, or even the socialist women's movement constructed women as 'weak being' and claimed 'family destruction'. As a result of stressing the capitalist exploitation to women's work from class stand of view without gender perspective, they constructed women as 'weak being'

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2008年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2009年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2010年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |

研究分野：複合新領域系

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：近代ドイツ、労働、労働運動、ジェンダー、フェミニズム、家族、ネイション、ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

(1)構造分析が主流であった労働史研究にお

いて、90年代の言語論的転換以降、歴史の諸局面にジェンダーに関するいかなるディスクールが登場し、いかなる意味付与がなされ、どのように差異化されていったのか、そしてそれがどのような労働秩序の構築につながったのかというあたらしい研究方法が登場した。制度、階級、アイデンティティ、労働の意味などがいかにジェンダーに依拠して形成されたのか、また逆に制度化や概念形成などのさいに同時にいかにジェンダーが構築あるいは再構築されるのかが、具体的な労働過程に則して解明されるようになったのだ。労働の担い手である主体に対しても構造に規定される被害者、逆に構造に働きかけて適応・変革していく主体というより、その人たちの現状認識の仕方がいかに状況の再生産あるいは変革に寄与するという認識論的側面が重視されてきている。こうした研究は、英語圏ではさかんに行われているが、ドイツ語圏では女性保護法など、一部をのぞいて本格的な研究は少ない。日本における西洋史研究でも、工場法や労働の一部については研究の深化が見られるが、労働運動史のジェンダー分析はほとんど存在しない。日本史の分野でも現代の労働に関するジェンダー研究の隆盛に較べて、ジェンダー視点からの労働史研究は、まだはじまったばかりである。

2. 研究の目的

本研究では、ドイツの近代化過程における労働運動を取りあげ、1、膨大な蓄積がある労働運動史研究が、スコットも指摘するように、「性差に関する知の産出と再生産」に寄与してきたので、その読み直しを行い、2、ドイツの労働運動を女性性・男性性の構築と関連させて扱う。そのさい、労働運動におけるA、女性排除の時期、B、女性との協力の時期に分けて、それぞれの歴史局面で、いかなる形でジェンダーの差異化が行われるのかについて考察する。1860年代に本格的に開始されたドイツの組織された労働運動は、当初、非常に女性に対して敵対的であった。労働運動、手工業的熟練、労働者アイデンティティ、男性性という結びつきの登場によって、これと対立関係にある女性性が構築され、排除の対象となったと仮定し、実際の運動過程のなかで検証する。協力の時期については、社会主義女性運動の誕生と、この運動と男性中心の労働運動との関係を、女性保護法の策定プロセスなど、具体例を通じて考察する。そのさい、とりわけ階級とジェンダーの関連に焦点を当て、階級性を強調する男女の労働運動において、ジェンダーがどのような位置を占めるのかに注目する。

歴史研究とともに、ジェンダーに関する認識が変化した現代の状況をとりあげて、歴史との比較の観点から考察する。

3. 研究の方法

まず、研究視角に関する考察を行った。女性史からジェンダー史への労働研究の変遷過程を追い、とりわけ言語論的転回をへたのち、労働のジェンダー史がどう変化したのか、またそのさい主体はどう扱われるのかに注目した。その後、労働運動関係、社会主義女性運動関係の雑誌や書物、労働調査報告などの資料をドイツの図書館や文書館への歴訪も含めて収集し、分析した。研究の過程でネイションやナショナリズムの問題にも関心を抱き、右派における労働とジェンダーの問題についても考察した。現代の労働については、日本およびドイツの企業でインタビュー調査を行った。

4. 研究成果

本研究では、ドイツ近代における労働運動とジェンダーの関連について考察した。19世紀中頃までは就業労働において〈男性の労働〉と〈女性の労働〉の境界線が明白で、既婚女性は主に家族従業員として、未婚女性は、家庭外での補助労働や家事奉公人として就業しており、男性優位の労働ヒエラルヒーが確立していた。19世紀後半、とりわけ70年代以降に機械化の進展によって工場労働が拡大すると、男性は女性の競争や女性労働に脅威を抱くようになる。労働運動においても、女性は家庭という言葉が登場し、運動から女性を排除して男性的な性格を強めようという動きが出てくる。女性労働に敵対的でない勢力や、女性の側でも、ジェンダー的視点をもたずに、もっぱら階級の観点が強調されるため、資本による女性労働搾取に反対するために、結果的に女性が「弱者」として構築されたり、「家庭の崩壊」が指摘されたりすることになる。本研究ではさらに、右派のナショナリズム系労働組織におけるジェンダー関係にも注目した。事務系の職業においても、19世紀末から女性の進出が見られるようになり、女性の競争に脅威を抱く男性事務員たちは、その元凶はフェミニズム運動にあるとみなして、当時勢力を拡大しつつあったフェミニズム運動への敵対を強め、20世紀初頭に形成された反フェミニズム組織に参加する。彼らにとって女性上司の存在は（実際にはそのようなケースは見られない）受け入れがたい屈辱であったため、「指導力・決断力のなさ」という女性の「本性」が強調されることになる。強国ドイツの建設にも意欲を燃やす右派勢力は、フェミニストはユダヤ人とならんでドイツを破壊に導く「インターナショナル」勢力だと攻撃し、世紀初頭の出生率減少の原因も

フェミニズムに寄せられることになる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

1, 姫岡とし子「近代化過程の日独機業における<女の労働><男の労働>」『史境』60号、査読有 (2010年3月), pp.20-28

[学会発表] (計6件)

1, 姫岡とし子「ドイツにおける『女性の運動』研究の変遷」(史学会第105回大会、2007年11月、東京大学)

2, 姫岡とし子「分科会 『仕事の人類学』が拓く地平—労働・ジェンダー・社会変容」コメント

(日本文化人類学会代42回研究大会、2008年6月、京都大学)

3, 姫岡とし子「ドイツにおける労働とジェンダー関係」(ジェンダー史学会 シンポジウム「労働のジェンダー史」、2008年11月、東京大学)

4, 姫岡とし子「近代化過程の日独機業における<女の労働><男の労働>」(歴史人類学会第30回大会、2009年10月、筑波大学)

5, 姫岡とし子「ワークライフバランスはなぜ必要か—変遷する家族関係、ジェンダー関係」(日独国際会議 企業・個人・社会のイノベーションファクター、2010年9月、ベルリン日独センター)

6, Himeoka Toshiko, Frauenengagement in der Vorkriegszeit in Deutschland und

Japan.

日独国際会議 Gender und Zivilgesellschaft

2010年9月、ドイツ、ハレ大学)

[図書] (計8件)

1, 姫岡とし子「日独における家族の歴史的变化と家族政策」「新しい家族政策と『家族のための地域同盟』I ドイツの新しい家族政策」本沢巳代子・ベルント・フォン・マイデル(編)『家族のための総合政策—日独比較の視点から』(信山社・2007年9月) pp. 3-27, 187-194.

2, 姫岡とし子「歴史学とジェンダー—近現代史」学術会議叢書14『性差とは何か—ジェンダー研究と生物学の対話』(日本学術協力財団・2008年1月) pp.74-80.

3, Himeoka Toshiko, Changes in Family Structure, in: Florian Coulmas, Harald Conrad, Annette Schad-Seifert and Gabriele Vogt(eds.), The Demographic Challenge: A Handbook about Japan, Leiden/Boston(Brill) 2008, pp.235-253.

4, 姫岡とし子「はしがき」「近代化過程における労働者のジェンダー化—ドイツにおける社会保険制度の成立とジェンダー」「コラム メタファーとしての売買春」「ドイツにおけるジェンダーの歴史学」『ジェンダー』(ミネルヴァ書房・2008年7月)、pp. i-vii, 207-248, 224, 20-23.

5, 姫岡とし子『ヨーロッパの家族史』(山川出版社・世界史リブレット・2008年10月)、90p.

6, 姫岡とし子「はじめに」「労働とジェン

ダーをめぐる研究視覚の変遷」「ドイツの女性運動と領域分離－ネイション・右派を中心に」姫岡とし子・川越修（編）『ドイツ近現代ジェンダー史入門』（青木書店・2009年2月）、pp. iii-viii, 132-140, 234-253.

7, 姫岡とし子「ドイツにおける労働者のジェンダー化－労働運動の営為を中心に」長野ひろ子・松本悠子編『経済と消費社会－ジェンダー史叢書6』（明石書店・2009年7月）p.107-122.

8, 姫岡とし子「まとめ」長野ひろ子／姫岡とし子（編著）『歴史教育とジェンダー－教科書からサブカルチャーまで』（青弓社、2011年2月）p.275-285.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

姫岡 とし子 (HIMEOKA TOSHIKO)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：80206581